

明日香をさぐる

高松塚古墳 未来への継承

今回は高松塚古墳壁画の未来について展望します。

昭和47年3月21日に発見された高松塚古墳壁画（以下、「高松塚壁画」）は、「飛鳥ブーム」「考古学ブーム」を牽引するとともに、世界規模での研究者の交流や多様な分野が協力する学際的研究のきっかけ、さらには「明日香法」制定の後押しともになり、様々な方面に多大な影響を与えることとなりました。そして高松塚壁画は、昭和49年4月に国宝に指定され、古墳自体も昭和47年6月に史跡、昭和48年4月に特別史跡に指定されることとなり、国民共有の宝として名実ともに認められることになりました。

発見されてからの高松塚古墳の管理は、その重要性から翌月に文化庁に委ねられることとなりました。文化庁では壁画の保存対策を検討する調査会が設置され、多角的な視点から議論された結果、現地で保存・修理する方針が決まりました。しかし石室内の湿度環境の変化や微生物の侵入等による劣化に歯止めがきかず、最終的に墳丘から石室を取り出し、解体して修理することとなりました。解体後は安全な環境が確保された保存修理施設において、顕微鏡を用いて酸素や紫外線等で汚れを取り除く緻密な作業が行われました。そして平成19年から進められてきた壁画の修理作業は令和2年3月に終了しました。現在は年に四回、保存修理施設で一般公開しています。

文化庁では現在、壁画の保存・活用のための新施設設置に向けた検討を行っています。新たな施設では壁画及び石材の保存を行い、その公開・活用とそれらをテーマとした展示活動を行う予定とされています。周辺にはすでにいくつかの施設が存在することから、その役割分担を明確にし、特にこの施設では壁画そのものの魅力だけではなく、東アジアという広い視点から飛鳥地域の古墳を捉えることのできる展示を予定されています。

また、高松塚古墳は世界文化遺産登録を目指している「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産候補ともなっています。高松塚壁画はこれまでの研究から中国や朝鮮半島の思想や美術に強く影響を受けていることが明らかとなつていきます。「律令」に基づく国家が形成される過程で、百済や高句麗の滅亡と新羅の朝鮮半島統一、則天武后による「周」王朝の成立など、激動の東アジア情勢における国際交流の物証としてその歴史的価値は国際的にも非常に高いものといわれています。現在登録を目指している「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」においても国際交流を語る上で欠かすことのできない重要な位置を占めています。

令和6年を目標としている世界文化遺産の登録、さらには文化庁により建設が予定されている新施設での保存・公開など、今後も世界中から注目される存在となることでしょう。このように、高松塚壁画が世界から注目されることとなったのは、発掘や保存・修復に携わっていただいた多くの関係者、明日香村を愛する全国の方々、そして守り続けていただいている住民の方々のたゆまない尽力によるものといえます。現在まで伝えられてきた国民の宝としての高松塚壁画の価値を適切に認識し、国民はもろろん、世界中の人々の宝として未来へ継承していかなければなりません。

（明日香村教育委員会文化財課）

令和4年3月21日に、高松塚古墳壁画が発見されて50年を迎えます。発見50周年を記念して、明日香村をはじめとした多くの機関では高松塚壁画関係の展覧会や講演会を実施する予定です。詳しくは明日香村公式ホームページ内の特設ページ「高松塚古墳壁画発見50周年について」をご覧ください。

